

簿記科目におけるオンライン授業

—学生へのアンケートを手掛りとして—



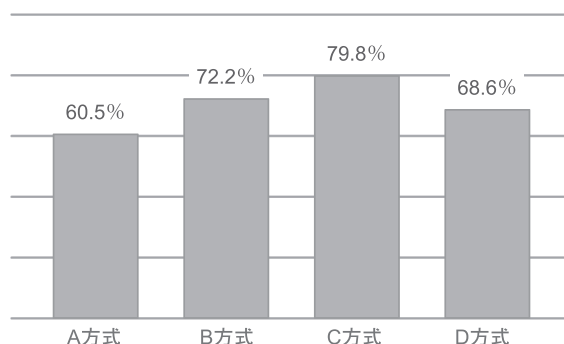
千葉商科大学商経学部 専任講師

根岸 亮平
NEGISHI Ryohei

プロフィール

早稲田大学産業経営研究所を経て、現職
専門は財務会計（金融商品会計）の研究

図表1 各授業方式における学生の満足度



「春学期オンライン授業に関するアンケート」より筆者作成

1 はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大防止を目的として、本学でも5月よりオンライン授業が実施された。オンライン授業の定義は多様であるが、本学では以下の類型に基づきオンライン授業が実施された。

- A方式…教科書または資料等＋文字解説資料（オンデマンド）＋課題
- B方式…教科書または資料等＋音声（オンデマンド）＋課題
- C方式…教科書または資料等＋動画（オンデマンド）＋課題
- D方式…教科書または資料等＋リアルタイム配信（音声または動画）＋課題

本学が学生に実施した「春学期オンライン授業に関するアンケート」¹によれば、これらの方式のうちB方式による授業が最も多く、C方式による授業が最も少なかったという。一方で、各授業方式における学生の満足度（「○方式についてどう思いましたか」に「良かった」と回答した人数の割合）は、以下の図表1の通りである。

図表1の通り、A方式（文字解説資料）よりもB方式（音声）、B方式（音声）よりもC方式（動画）というように提示される資料の情報量が増えるほどに学生の満足度が高くなる傾向にある。しかしながら、D方式（音声または動画によるリアルタイム配信）に着目すると、B方式またはC方式と同程度の情報量（もしくはそれ以上）になるはずにもかかわらず、学生の満足度はそれらの方式よりも低くなっている。

授業を実施する教員の視点からこのアンケートを見ると、なぜD方式による授業の満足度が低くなるのかという率直な疑問が生じてくる。もちろんこのアンケート結果だけでは、何らかの結論を導き出せる根拠とはならないが、そこにはオンライン授業に対する認識ついて、学生と教員との間に何らかのギャップが生じている可能性があるように思われる。

そこで本稿では、筆者が担当した商経学部の簿記科目におけるオンライン授業の取り組みを紹介するとともに、それらの取り組みに対するアンケートについて検討を行う。具体的には、テキストマイニング等により、オンライン授業に対する学生の認識の一端を明ら

¹ 実施期間：2020年7月13日～16日 / 回答者数：4,610名

かにする。本稿の検討により、上記のアンケート結果に係る問題意識をすべて説明しうるものではないが、今後のオンライン授業のあり方に資するものとなれば幸いである。

2 商経学部における簿記科目

商経学部においては、アカウントティング・コースが設置されていることもあり、様々な簿記会計関連科目が設置されている。これらの科目のうち、商経学部において設置されている簿記科目は、以下の通りである。

- 初級簿記Ⅰ / Ⅱ…日商簿記3級程度の内容
- 中級簿記Ⅰ / Ⅱ…日商簿記2級程度の商業簿記
- 上級簿記Ⅰ / Ⅱ…日商簿記1級程度の商業簿記
- 工業簿記Ⅰ / Ⅱ…日商簿記2級程度の工業簿記

2020年度春学期、これらの簿記科目は、基本的にこれまでの対面授業と同じ担当教員によりオンライン授業として実施された。オンライン授業の実施にあたっては、担当教員により事前にオンライン会議を行い、シラバスの内容やこれまでの対面授業と同等の質を担保しつつ、同一科目については授業内容や実施方法などについて統一化が行われた。

これらの簿記科目のうち、筆者が担当した簿記科目は、初級簿記Ⅰおよび中級簿記Ⅰ / Ⅱである。これらの簿記科目においては、Microsoft Teams の会議機能、チャット機能および課題機能を用いてオンライン授業を実施した。

3 初級簿記Ⅰおよび中級簿記Ⅰ / Ⅱの授業の取り組み

本節では、筆者が実施した初級簿記Ⅰおよび中級簿記Ⅰ / Ⅱのオンライン授業の取り組みについて紹介する。

3.1 初級簿記Ⅰ

初級簿記Ⅰは、主に大学1年生を対象とした必修科目であり、特に初学者を対象とした基礎を学習する通常クラスと検定試験に向けて集中的に学習する受験クラスとに分かれている。筆者はこのうち通常クラスを

2つ担当し、履修者はそれぞれ68名(2年生1名、1年生67名)、64名(1年生64名)であった。

この初級簿記Ⅰ(通常クラス)におけるオンライン授業の流れは、次の通りである。まず、学生は講義開始時刻になると、Teamsの初級簿記Ⅰのチャンネルにて開始されている会議に参加し、本日の講義概要および出席コードについて説明を受ける。そして、各自で出席登録を行った後に、当該チャンネルにアップロードされた授業動画により学習する。なお、授業形式をD方式ではなく、主にC方式にしているのは、学生への通信環境への配慮のためである²。

動画を視聴した後は、理解度の確認のため2つの課題をTeams上から提出する。1つは授業時間内に提出する課題であり、もう1つは次の授業日までに提出する課題である。講義の内容や課題について不明点などがあれば、授業時間に開始された会議に参加し、通話またはチャットに直接質問を行うことができる仕組みとなっている。

3.2 中級簿記Ⅰ / Ⅱ

中級簿記Ⅰ / Ⅱは、全学年を対象とした選択科目であり、初級簿記単位取得者や日商簿記検定3級を取得している学生を対象により発展的な内容を学習する。筆者は中級簿記Ⅰおよび中級簿記Ⅱを1クラスずつ担当し、それぞれ履修者は78名(4年生9名、3年生13名、2年生43名、1年生13名)、65名(4年生9名、3年生15名、2年生25名、1年生16名)であった。

この中級簿記Ⅰおよび中級簿記Ⅱにおけるオンライン授業の流れは同一であり、次の通りである。まず、学生は講義開始時刻になると、Teamsの中級簿記Ⅰ / Ⅱのチャンネルにアップロードされた授業資料(音声または動画)により学習する。なお、学生への学習および通信環境への配慮のため、毎回音声資料と動画資料の両方がアップロードされており、すなわちB方式とC方式を併用しているため、各自の環境に合わせて学習することができる。

授業資料により学習した後は、理解度の確認のため課題をTeams上から提出する。これは、次の授業日までに提出する課題である。講義の内容や課題について不明点などがあれば、授業時間に開始された会議に参加し、通話またはチャットに直接質問を行うことができる仕組みとなっている。

2 なお、2020年度入学者よりPC必修化となり、事前のアンケートにより履修者が動画視聴可能な通信環境であることは確認している。

4 履修者へのアンケート

これら初級簿記Iおよび中級簿記I/IIの授業について、大学による授業評価アンケートとは別に、授業の最終回においてMicrosoft Formsを用いて履修者へアンケートを行った。具体的な質問項目は下記の通りであり、それぞれの項目について【5(とてもよかった)・4(よかった)・3(ふつうだった)・2(わるかった)・1(とてもわるかった)】という5段階の評価を設けた。図表2は、それぞれの授業における各質問項目についての平均スコアをまとめたものである。

図表2 履修者へのアンケート結果

	初級簿記I n=126	中級簿記I n=67	中級簿記II n=56
オンラインでの授業はどうか	4.7	4.5	4.6
授業資料の内容はどうか	4.2	4.3	4.4
授業資料の量はどうか	4.5	4.0	4.2
課題の難易度はどうか	4.4	4.2	4.2
課題の量はどうか	4.2	4.4	4.4

この結果を見る限り、各質問に対する平均スコアは高い傾向にある。ただし、この結果には授業に対する純粋な評価だけではなく、授業時間内においてアンケートを実施したこと、Formsにおける二重回答を避けるため記名式の回答であったことなどの影響が考えられる。

さらに、このアンケートでは、各授業についての感想を記入する自由記述欄を設けた。それぞれ授業における記述内容について、テキストマイニングの1つで

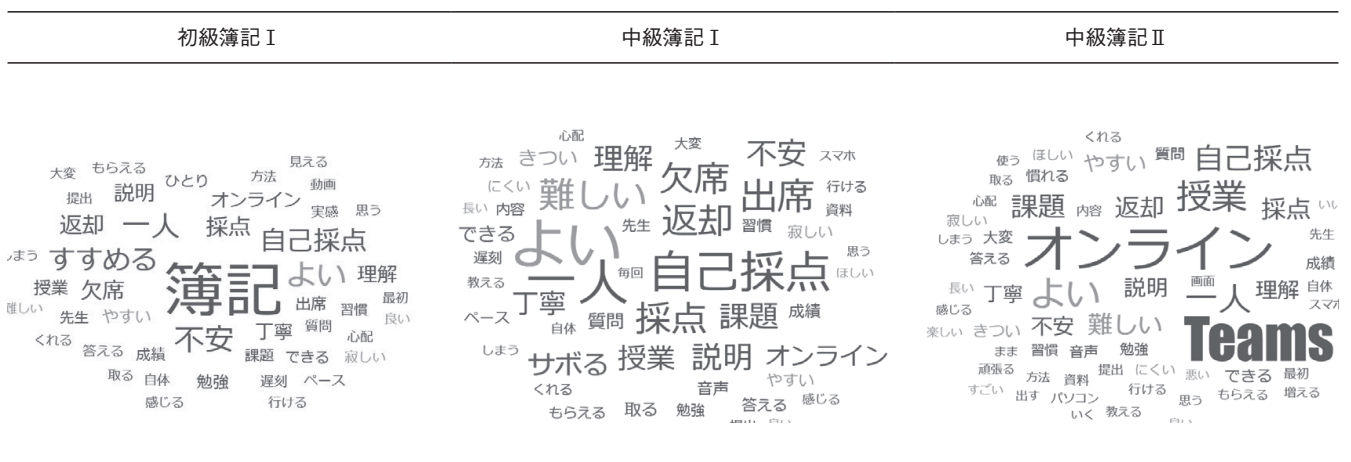
あるワードクラウドで視覚化すると、次の図表3の結果となった。

ワードクラウドにおいては、スコアが高いワードを複数選び出し、その値に応じた大きさとそれぞれのワードが図示されている。ここでいうスコアとは、テキストの中でそのワードがどれだけ特徴的であるかを表している³。この結果によると、各授業における平均スコアを反映するようにポジティブなワードが見られる一方、各授業における平均スコアに比して「一人」や「不安」といったネガティブなワードも散見される。

また、履修者が1年生中心である初級簿記Iよりも、履修者が多学年にわたる中級簿記I/IIのほうが多くのワードが図示されている。まだ大学において対面授業を経験していない1年生と、大学において対面授業を経験している2年生以上の履修者とはオンライン授業に対する感じ方も異なっている可能性がある。そこで、これらのテキストを1年生とそれ以外の学年とに分けてワードクラウドを図示すると以下の通りとなった。

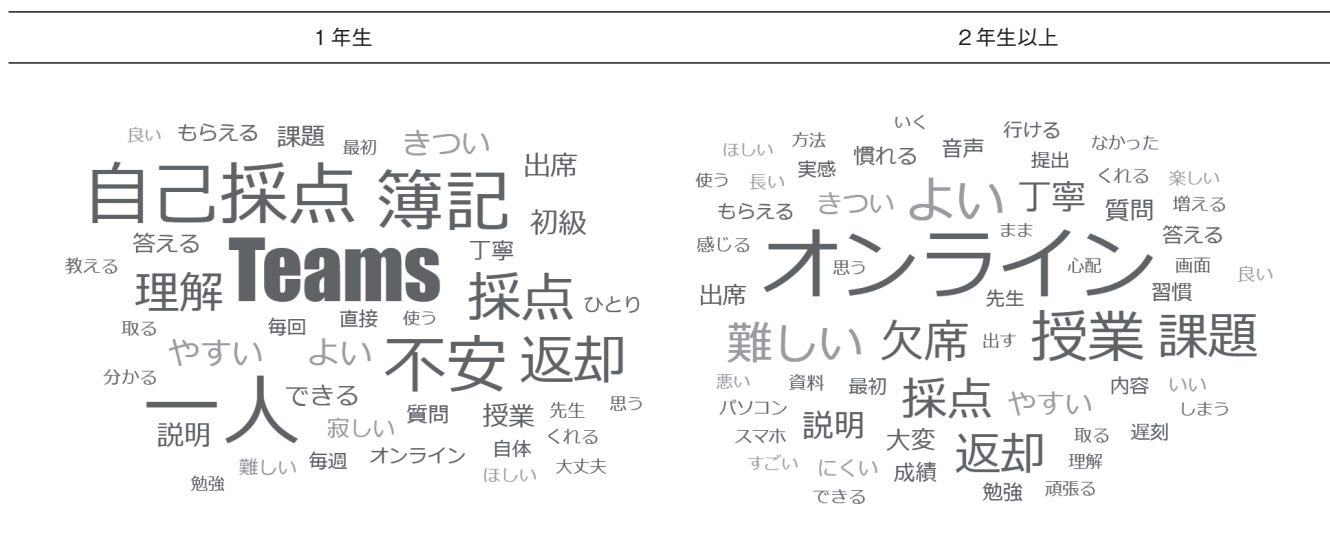
図表4の通り、1年生のワードクラウドでは、2年生以上のワードクラウドよりもネガティブなワードのスコアが高いことが伺える。実際にテキストを確認すると、1年生のテキストでは、オンライン授業に対する漠然とした不安や自宅などで一人で勉強することに対する孤独感などの記述がみられた。一方で、2年生以上のテキストでは、動画を見返すことができることや、効率的に学習できることなどの記述がみられ、簿記科目に関してはオンライン授業であることに肯定的な意

図表3 各授業におけるワードクラウド



3 基本的にはワードの出現回数が多いほどスコアが高くなるが、「言う」や「思う」など、どのようなテキストにも現れやすいようなワードについてはスコアが低くなる。

図表4 各学年におけるワードクラウド



見が多かった。
次節では、本稿の総括を行うとともに、これらの点について若干の解釈を加え、今後の展望について述べることとする。

5 おわりに

本稿ではなぜD方式による授業の満足度が低くなるのかという問題意識を出発点として、筆者が担当した簿記科目である初級簿記I及び中級簿記I/IIにおけるオンライン授業の取り組みを紹介し、各授業で実施されたアンケートについて検討を加えた。

その結果、定量的な評価においてはオンライン授業においても高いスコアが出ている一方、記述形式によるアンケートにおいて学生が感じているオンライン授業に対する率直な印象を伺い知ることができた。具体的には、まだ対面授業を経験していない1年生についてはオンライン授業に対してネガティブな記述をしている傾向にあり、2年生以上についてはオンライン授業に対してポジティブな記述をしている傾向にあることがわかった。

なぜこのような傾向となるかについては様々な解釈

の余地が残されている。これらの傾向は、簿記科目特有のものであるかもしれないし、担当教員に起因するものであるかもしれない。ただ、各授業の定量的なスコアが高い傾向にあったことから、特に対面授業を経験していない1年生はオンライン授業全般に対して、少なくとも潜在的にはネガティブな認識を持っていることを示唆しているのかもしれない。それは、対面授業ではなくなったことによる喪失感であるかもしれないし、大学への期待の裏返しとも捉えることもできる。このことを本稿冒頭の問題意識に結びつけて解釈するとすれば、対面授業に一番近いはずのD方式において、他の方式より高い学生の期待に応えきれなかった結果ということを示唆しているのかもしれない。

もちろん、本稿で得られた示唆は限定的であるため、オンライン授業に対する学生の反応についてはより精緻な検討が必要となる。その結果を踏まえた上で、オンライン授業を設計していく必要があるだろう。今後、本学としてもオンライン授業は、単に対面授業をオンライン化した授業にとどまることなく、オンラインであることのメリットを活かし、デメリットをカバーすることのできる授業設計を行っていくべきであると考え